

認定こども園おとぎのくに 新園舎建て替え



令和4年1月1日に始まった新築住宅購入支援金をはじめとした町の移住定住施策の効果で、転入者が増加しており、町では保育ニーズが高まっています。このままでは、近い将来待機児童が発生してしまうおそれがあるため、認定こども園おとぎのくにの運営法人である高陽福祉会が新園舎建て替えを進める運びとなりました。町は、国の交付金を活用し、建て替えの費用を補助します。

それに先立ち、3月29日に保護者説明会が行われ、前田元照理事長は「園児が毎日通いたくなるような魅力ある園舎にしたい」と新園舎にかかる思いを述べていました。



新園舎のポイント

- 🏠 0～1歳児室の面積拡大
- 🏠 2～5歳児室をそれぞれ2室へ増設

➡ 定員 50人増 (令和4年度比)

工事スケジュール (予定)

- 🏠 令和5年7月 着工
- 🏠 令和6年2月 竣工
- 🏠 令和6年3月 現園舎解体

とらべつ

歴史余話

目をひるがえすと、青い海のなかまでそのイシカリ川がのさばっている。年中澄むこともなく泥土に汚れている水は、先日来の氾濫のなごりを見せて一層重々しく濁り、一層猛々しく押しだして行った。海水とは容易に混らうとしない。はっきりけじめをつけた異質の水は、当分のあいだ、海の中にその川を描きわけて見せる。岸を打つ波のうねりは、河口一円に亘つて大きな弧をつくり、何故か敬遠して途中でびちやびちやと消えてしまった。

河水は洋々と間断なく海の中におしこみ、捻じてこんでいた。

(本庄陸男『石狩川』大観堂、昭和14年)

これは、明治4年、石狩川河口に近い当別原野の調査に向かう旧仙台藩支領岩出山領主伊達邦直の首席家老である吾妻謙が眺めた石狩川の風景である。だが、吾妻が目にしたこの石狩川の風景は、現在の石狩川とまったく同じではない。広大な空知平野と石狩平野を自然のままに蛇行して日本海に流れ込む石狩川は、流域の開発が本格的に始まる北海道庁時代に入ると強力に推しすすめられた治水事業によって大きく変貌を遂げた。大正期に入るとショートカットする捷水路工法が採用され、現在では当初の石狩川の姿から距離にして約150キロメートルも短縮されてしまったのである。

さて、今日の北海道には北海道開発局が管理する13の一級河川があるが、その中で最長を誇るのはもちろん石狩川である。その源流を大雪山系の石狩岳に発するこの川は、層雲峡を経て上川盆地に流れ込み、ここで牛朱別川や忠別川などの支流と合流する。その後、神居古潭を経て石狩平野に

第29回 当別町の開拓と石狩川

『新当別町史』監修者

桑原 真人

到達するや、雨竜川・空知川・夕張川・千歳川・豊平川といった支流を合わせながら最後の石狩市で日本海に流れ込んでいる。この石狩川の1万4330平方キロメートルという流域面積は全国で第二位、本流の全長268キロメートルは利根川、信濃川に続く全国第三位の位置を占めている(北海道開発協会『北の悠流』平成18年)。

このように豊かな水量を誇る石狩川の中流から下流における人と水との関わりを、近代における開拓の歴史の視点から取り上げてみると、とりわけその右岸地域に個性的な開発の歴史を持つ自治体が存在する。河口付近にあって、近世の松前藩に遡る石狩市に始まり、明治初期の仙台藩士族の集団移住によって開拓された当別町、戦後に泥炭地を改良、水田化した新篠津村、樺戸集治監の開設によって市街地が形成された月形町、高知県人による聖園農場が開設された浦臼町、奈良県十津川村の団体が集団移住した新十津川町、華族組合



図版 本庄陸男の文学記念碑

農場の後裔である元徳島藩主・蜂須賀家の経営する蜂須賀農場の雨竜町、といった具合である。その中でも、このような開拓の歴史の先兵としての役割を果たしたのが当別町であることを、この小説によって改めて確認させられたのである。

消費者が求めている お米を作りたい

松山 雅一 さん



有機の田んぼで除草した後の様子

ここに書ききれないエピソードや写真は
当別町ホームページ「現在を生きる+」
でご覧ください。



蕨岱で有機農業のお米を生産し、当別町クリーン農業協議会の会長も務める松山雅一さんにお話しをお聞きしました。

有機農業を始めて

先代の父から40年ほど前に農場を継ぎ、平成20年から化学肥料や農薬、除草剤などを一切使用しないJAS有機農業によるお米の生産を行っています。

有機農業を始めたきっかけは、農薬を使用した際に自分自身が体調を崩すなど体の異変を感じていたことや、平成7年に食糧管理法が廃止され、政府への販売ではなく個人での販売が可能となり、販売経路の選択肢が増えたことです。また、お米を販売しているうちに、消費者の方が低農薬のお米を求める気持ちが強いことに気付いたことも1つの要因です。

当初は完全な有機農業ではなく、田んぼ一枚で農薬を減らしてスタートしました。出来上がったお米で残留農薬検査をしたところ、農薬や化学肥料の使用が少ない特別栽培米としての一定基準をクリアしていました。また、飲食

店への販売経路も確保することができたので、本格的に有機農業に取り組みました。

苦労の日々

有機農業は除草がとにかく大変でした。本州の専門家に除草の指導を受けましたが、本州と北海道では気象条件が全く違うので、思うようにはいきません。機械の導入や情報収集、試行錯誤を繰り返して、自分で納得する技術を確立するのに10年ほどかかりました。

カメムシによる虫食いの被害も多いので、色彩選別機を使って精米をする前に選別し、虫食いのお米を取り除いています。昔は、虫が食べているから安心というイメージがあったかもしれませんが、今は見た目も味もクオリティを高くする必要があるため、ブランド化を図るためにも対応が必要です。

当別町クリーン農業協議会では

昨年9月に、私が会長を務める当別町クリーン農業協議会を設立しました。メンバーは私を含めて7人。国では、2050年までに耕

地面積に占める有機農業の取組面積の割合を25%にするなどの目標を掲げています。

協議会では、学校給食に有機の米・小麦・野菜・卵を取り入れるなど、まずは町民の方に食べてもらえるように、学校給食への食材提供を進めたいです。

今後の目標

消費者とつながることが大事だと思うので、生産者・消費者・流通・行政など官民一体で有機農業を広めることができれば面白いと思います。

現在、世界を相手とした市場に将来性を感じており、世界中の人と対話ができる仮想空間(メタバース)上に、松山農場のブースを作ってお米の販売サイトにつながるようにしています。その中で、世界中の人に当別のことを知ってもらえる一つのきっかけとなるようなお米を作りたいと考えています。

松山農場

<https://www.riz-japan.com/>
松山さんが運営する
ホームページです
ご覧ください

